

# オトメドン号、ドイツ海軍に拿捕される

一九四〇年五月一日にはドイツ軍が西部戦線で総攻勢を開始し、六月十日にはイギリス軍をダンケルクから追い落とし、八月にはイギリス本土の空襲を激化させたが、イギリスは屈しせずドイツ軍は行き詰まってしまった。この戦局を憂慮した駐日ドイツ海軍武官のベネカー大佐は、十一月二十一日に海軍総司令官シュニエーヴィン大将に次ぎの電報を發した。

ドイツにとり最も重要な目標はイギリスの屈服であり、日本の対英参戦こそ、この方向への第一歩である。現在アメリカが事実上ドイツと戦争状態にあり、アメリカの参戦による不利益は日本の参戦による利益ほど重大ではない。アメリカが参戦してもその鋒先が専ら日本に向けられることは確実であり、このため小官は日本を扇動して南方へ攻勢をとらせるよう全力を傾注すべきと考える。日本陸軍首脳もこの見解に反対でないので海軍の説得に成功すれば、この方向へ進出することへの障害は総て除去されるであろう。

## オトメドン号事件

謀略文書といわれていた「オトメドン号文書」は本物の文書であった。しかし、この本物の文書がドイツ・イギリスの謀略を成功させ、日本を第二次世界大戦へと導いてしまった。

### 平間洋一の

# ヒストリカル ア イ

NEW COLUMN  
BY Youichi Hiram  
volume 4



（プロフィール）  
平間洋一（ひらま・よういち）  
●歴史学者。元海軍補。元防衛大学校教授。1933年5月神奈川県横須賀市出身。1957年防衛大学校（電気工学科）卒。1957年海上自衛隊に入隊。1958年3等海尉任官、同幹部学校指揮幕僚課程、護衛艦「ちとせ」艦長等を経て、1988年退職（海尉補）。同年より防衛大学校講師、教授を経て1999年退職。現在は軍事史学会理事、呉市海軍歴史科学館（大和ミュージアム）委員、横須賀市歴史編纂委員などを務める。  
1996年、慶応義塾大学より博士（法学）取得。著書には、『艦艦大和講談社選書メチエ 269(編著、講談社 2003年)、『日露戦争が変えた世界史』(単著、芙蓉書房出版、2004年)

情報の極意は謀略にある。ここに半世紀近くイギリスが日本軍にシンガポールを攻撃させ、アメリカを参戦させようとした謀略文書であったとの説と、ドイツが日本にシンガポールを攻撃させようとした謀略文書であったとの論争があった。しかし、最近の秘密文書の公開でイギリス側の不注意で奪われた正規の文書であることが判明し、英独の謀略説は消えた。しかし、このイギリスの不注意が日本を南部仏印進駐に誘い、日本を太平洋戦争に導いてしまったのである。

この電報が影響したのであるうか、ドイツ海軍総司令官は十二月二十七日にヒトラーに日本軍のシンガポール攻略はアジアからイギリスへの食料や鉄・錫などの戦略物資の供給を止め、さらにインド、東アジア、オーストラリアなどに動揺を与え、イギリスの威信を低下させるがアメリカの参戦を招くことではないであろうとの意見具申を行った。また、年が明けた二月十八日には、ドイツ海軍作戦部長フリツケ中将から駐独海軍代表の野村直那中将にシンガポール攻略が要請された。

これより先の四〇年十一月十一日に、ドイツ武装商船アトランティス号がイギリス商船オトメドン号をニコバル島沖で拿捕し、船内から商船暗号書や郵便物六十袋を押収したが、その中にイギリス戦時内閣の議事録と三軍統合司令部作成の「極東防衛に関する情勢判断（七月三十一日付）」などが発見された。この文書によるとイギリスは日本軍の南方進出を阻止できないという悲観的なものであったが、この文書は機密文書を商船に搭載するという不注意により奪われた正規の文書で、そこには次のような方針が記載されていた。  
●現情勢では極東への艦隊派遣は困難である。

●艦隊がなければアジアの利権を護り難い。一時、反撃し得る地点まで後退すべきである。

●日本軍が仏印やタイに侵攻しても開戦しない。

●日本がインドネシアを攻撃し、オランダが抵抗しなければ、イギリスも日本に宣戦しない。

## オトメドン号の情報とシンガポール攻略要請

拿捕されたこの文書はアトランティス号が捕獲したノルウェー船オル・ヤコフ号によって十二月四日に神戸に運ばれ、五日にベネカー武官に渡され、七日にはドイツ海軍総司令部に主要部分で電報で報告された。そして、十二月十二日にはベルリンの海軍武官横井忠雄大佐と軍令部長近藤信竹少将に知らされた。この情報を受け取った近藤次長はシンガポールの防備態勢が、このように貧弱であるとは判らなかつたと驚き感謝したという。『海軍武官城英一日誌』の四二年十月十二日に、「二〇三〇独（特選艦長、オット大使及付海軍武官と共に謁見）」とあり、艦長には勲三等瑞章が授与された。艦長程度の者に拜謁を賜るのは異例であり、このことからオトメドン号の情報

如何に貴重であったかが理解できるであろう。しかし、この文書は十二月十七日に「泰及ヒ印二対シ採ルベキ措置」を決した第三回政府大本営連絡会議で、及川古志郎海相に「文書謀報ニ依レバ英国ハ日本ガ仏印ニ止マル限リ戦ヲ欲セス。蘭印ニ延ビルトキハ戦争必至ナリト判断セラル」との発言を導いたが、その後も日本が動かかなかつたためシンガポール攻略要請は続いた。四年二月二十三日にはリッペンントロップ外相が、着任早々の大島浩大使に「自らの利益のためにも、可及的速やかに参戦されたい。決定的打撃はシンガポール攻撃であろう。日本が講和条約締結までに手の中に入れてい、東南アジアの資源地帯を確保しておくことが、日本の利益と大東亜新秩序建設のためにも必要であろう。また、アメリカが参戦し艦隊をアジアに派遣するほど軽率ならば、戦争を電撃的に終わらせる最大の好機となるであろう。すべての仕事は日本艦隊が片付けると確信している」とシンガポール攻撃を誘った。

●連軍GRU（赤軍諜報部）スパイのリヒトヤ・ゾルゲの尋問調査によれば、在京のドイツ大使館ではオット大使を統帥官としてヴェネカー海軍武官、クレチマー陸軍武官、グロナウ空軍武官などを中心に日本軍のシンガポール攻略上演習を行い、この上演習の推移や結論をもとに日本側を説得したという。

## それでもなお、太平洋戦争に突入した日本

二月二十八日にはリッペンントロップ外相からあらゆる手段を用いて、可及的速やかにシンガポールの攻略を申し入れよとの指示を受けたオット大使は、三月四日に参謀総長杉山元大將および軍令部長永野修身大將などを大使館に招き、ドイツの英本土上陸作戦の準備はすでに完了し、「決行ノ時機ハ一二総裁ノ決定ヲ待ツ迄ニナツテオリ……此ノ英帝国ニ対スル決戦ノ時機ニ東西相応シ、日本軍がシンガポールを攻略するのがよいのではないか。アメリカの戦争準備ができる前にイギリスが「崩壊」シタ場合ハ、米國ガ戦争ニ入ルコトハナイト思ヒマス。ドイツとしてはアメリカの参戦前に英本土と地中海方面に「決定的な攻撃戦」を開始するので、日本もこれに応じてシンガポールを攻略するならば「天イニ感謝スル所デアリ、日本トシテモ有利デアロウ」とシンガポール攻略を要請した。三月五日にはヒトラーから日本に可